

7月7日、土曜日

あばれ祭の代名詞である「あばれ神輿」。今年も酒垂・白山の2基の神輿が海や川、火の中に投げ込まれたり、地面にたたきつけられたりしながら八坂神社

神輿

に入り宮した。

神輿を壊すことが目的ではない。神輿が壊れるほどに暴れることが、八坂神社の祭神を呼び寄せ、喜ばせることができるとされているからだ。



奉燈



7月6日、金曜日

本来、神輿の前後を照らす役割の奉燈（キリコ）だが、この日は主役となる。40数本のキリコは、午後3時ごろから各町内を回って棚木海岸に集結（棚木詰めと呼ばれる）。夜は役場前広場に設置された大松明の周りを火の粉を浴びながら乱舞する。

翌日には無数のやけど。それはあばれ祭が好きの人にとって「誇り」であり、「名誉の負傷」なのだ。



抒情書家

室谷一柁さん

朱琴さん

文音さん



能登には
私たちが求める
すべての物がある。

京都から能登へ

平成18年3月22日、大箱地内の古い空き家の前に3人の家族が立っていた。京都府美山町で抒情書家として活動していた室谷一柁さんと朱琴さん夫妻、そして娘の文音さんだった。

経済的挫折で20年以上過ごした自宅兼アトリエを追われ、新天地を日本中探し回ったという室谷さんが、絶望の中で最後に紹介された場所がここ能登だった。神戸の知人が室谷さんに升谷一宏さん・伸子さん夫妻（＝松波）を紹介、伸子さんと同じ教育委員の伸谷由美さん（＝天坂）が探した場所がこの大箱の家だった。

「この家待っていてくれた。」

初めてこの家を見た朱琴さんは、立ちすくみ思わず涙がこぼれたという。ほかにも10件近くの空き家を紹介されて宿泊先に戻った3人の意見は、最初に訪れた大箱の家で一致、新しいスタート地点をここ能登町大箱に決めた。それからちょうど1カ月後の4月22日に引っ越し、室谷一家の能登での暮らしが始まった。

囲炉裏を囲む生活

室谷さんの生活は、美山町時代から変わることなく、テレビ・ラジオのない生活をしている。囲炉裏を囲み、家族で話し合う時間を大切にしながら、創作活動をする。「抒情書家は、自分たちの生活

の中で浮かんだ言葉を墨で表現する。だからこそ普段の生活が大切」と話す一柁さん。縁側を望む二間の和室をアトリエとし「硯・墨・紙・筆（中国語で四友）」に「水」を追加し「五友宿」と命名した。

言葉探しの旅 ～室谷一柁～

室谷さんは、書道家ではなく抒情書家を生業としている。書道家のように弟子を持たず、書のみで生計を立てる職業が書家であり、一柁さんいわく「書のシンガーソングライター」なのだという。抒情については「抒情の【抒】は井戸のつるべのこと。自分の手で自分の気持ちをくみ上げるという意味」と説明する。

「自分たちの生活は言葉探しの旅。能登で生活することになって目や感性は旅人でありたい」と話す一柁さんが、能登に来て感じた言葉は「海」だった。

「美山町の暮らしては山と川だけだったが、能登に来て海が加わった。海の人海の匂いが身近に感じられるようになり作風も変わった」と話す。

ヤマノフモトデ

ココロタガヤスヒト

カワノホトリデ

ココロアラウヒト

ウミノナギサデ

ココロホドクヒト 一柁作

能登半島の海が一柁さんの作品に広がり奥深さを与えている。

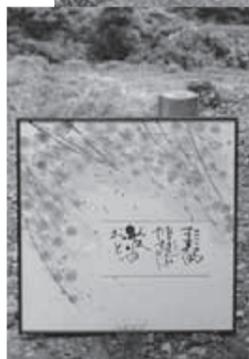
むろや・しゅきん

1947年兵庫県生まれ。大学時代の書道部の先輩である一柁さんと1971年に結婚。以後夫婦書家として一柁さんとともに幅広く活躍。

室谷朱琴

抒情書家

能登には本物がある。



室谷文音

抒情書家

能登はわたしの第二の故郷

むろや・あやね

1980年大阪府生まれ。一柁さん、朱琴さんの一人娘。13歳でイギリスに渡り、芸術大学「セントラル・セント・マーティンズ」を卒業する。イギリスでの永住権を取得し、現在も在住。日本では、家族3人で作家活動。

人を結びつける芸術

室谷さんは昨年11月、能登での初めての展覧会を五友宿で開催、224人が大箱の地を訪れ、地元の人々も驚いたそうだ。「人が生活するのに必要なものは衣食住だが、心を豊かにしてくれるものが芸術。そして芸術が人と人を結びつけてくれる」と話す一柁さんの今後の大きな目標は、能登を世界に発信することだ。

「2010年にここ大箱に世界中から人を集めたい。そのために今から少しずつ準備している」という。能登町に移住してきた3人の抒情書家は、「能登」で探した言葉を墨で表現し、輪島市にある「能登山河工房」の表具師が作品に仕上げ、珠洲焼きで作品を彩る。「能登で全てをまかないたい」と「能登」にこだわり、「能登」のために活動し、「能登」を「世界の能登」にできると考えている。外から見ると「能登」にはそれだけの価値があるのだ。

3人は「能登に暮らしている人は、もっと誇りをもっていい」と口を揃える。次の展覧会【五友宿「墨から炭まで」展・・・くらしにいろどりを】は、輪島市の「健康の森」で8月8日から9月9日まで開催される。ぜひ一度足を運び、室谷さんの書の世界に触れてみてほしい。

むろや・いっしゅう

1944年大阪府生まれ。学生時代から書を学び、1981年から抒情書家を名乗る。1985年に京都府美山町にアトリエを構え、年に数回展覧会を催す。アメリカ・ドイツに招かれ展覧会に出品。講演会の講師を務め、新聞にエッセーを連載。



室谷一柁

抒情書家

目や感性は常に旅人でありたい。



能登には本物がある (室谷朱琴)

色墨を使った独特で温かい墨絵が作品の特徴である朱琴さんは「能登に来てからおおらかな心になり、作品に広がりが出てきた」と話す。能登町での1年3カ月の生活を「もうダメだと思ったこともあったけど今は幸せ。当たり前のこともとてもありがたい」と振り返る。

また、朱琴さんは能登に来てから詩を書くようになった。朱琴さんが能登をうたった詩に曲が付き「能登風」というCDを制作した。

あなたに見せてあげたい「能登

詞・室谷朱琴

大地を抱くように日が昇る
広がる海に伸びゆく心
踏みしめて 踏みしめて
風が渡つていく心のふるさと
あなたがここを訪れるころには
白くきらめく立山の峰
あなたに見せてあげたい
能登の海

CDには、ほかにも能登半島地震をきっかけに書いた「希望のKAZE」2007.3.25より」など4曲が収められている。「能登には本物がある」という朱琴さんの想いが込められた詩と優しいメロディーは、能登のすばらしさを「音楽」という観点からわたしたちに再認識させてくれる。

世界との架け橋に (室谷文音)

「筆を持つより筆を持つ方が早かった」という文音さん。5歳のときに全国ネットの報道番組に特集されたり、雑誌に連載されるなど、その才能はマスコミにも注目されてきた。

文音さんは、中学1年のときにイギリス留学を決意し、翌年6月に単身イギリスに渡った。「人に合わせるエネルギーを自分のためだけに使ってみよう」という強いつらさから望んだ留学だった。

中学・高校・大学とイギリスの学校を卒業した文音さんは、現在ロンドンで通訳などのアルバイトをしながら創作活動をしている。今回能登には3カ月の滞在予定で、両親とは引越しの時以来の再会だった。

「ヨーロッパでは書という文化がないので、ひとつのアートとして見てもらえる」という文音さんの作品は、「白と黒の世界」と一柁さんがいうとおり、文音さんのイメージレーションや心の中が、墨で描かれたような不思議な雰囲気がある。

「能登に来て海がイメージできるようになった」という文音さん。「わたしの作品を見て、若い人に墨はおもしろいもの、楽しいものを知ってもらいたい」と話す。今後は能登とロンドンを半年ずつつ過ご

みんなが つなぐ

—公民館通信—
第2号

上町公民館編

暮らしの中へつながるもの
仲間作りや地域作り
公民館へ集うみんなが
つながっていく活動をほ指す
上町公民館を
紹介します



みんなの力が地域の力

平成17年、上町・斉和・合鹿の公民館が一つになり新しく生まれ変わった上町公民館。天然記念物のミズバショウ群生地としても知られる中斉地区の斉和分館と、輪島塗のルーツといわれる合鹿椀の里に位置する合鹿分館は、平成14年に閉校した中斉・合鹿小学校の跡地を利用して設置されています。活動の拠点となる上町公民館の事務所は、同じく平成14年に閉校した上町小学校の校舎の中にあります。

上町公民館では地区全体を対象とした

地域全体を活動スペースとして

公民館には「いろいろなことを学びたい」と感じる方に場所と情報、そして共に時間を過ごす仲間を提供するという一つの役割があります。しかし、事務所がある上町公民館には町議会事務局なども隣接しているため、自由に使えるスペースは限られています。そこで、公民館ではさまざまなアイデアを出し合い、地域に出向く「出前講座」のような活動をより充実させるなど、地域の特性やニーズに合わせた計画も進めています。

昔から公民館は地域に密着し、人々が集う場所として利用されてきました。そして近年では地域の環境に合わせて、その形態や活動内容も変化してきています。長年、地域文化の拠点として親しまれ

教養講座やスポーツ活動はもちろん、3地区独自の行事も行っていきます。地区独自で開催する場合には、地区ごとに選ばれた委員による会議が年数回開かれています。上町公民館のように対象地域が広範囲にわたる場合、このような委員のみなさんの力添えが必要です。公民館が主体となる、社会体育大会やレクリエーション大会、料理教室や趣味の教室などの行事は、そんな地域の強い連帯感に後押しされ行われているのです。

また、子どもたちを対象にしたボランティア活動も盛んです。野菜を栽培・収穫し、その野菜でお菓子を作ってお年寄りへプレゼントしています。心が触れ合う貴重な経験であり、お年寄りからも大変喜ばれています。



公民館裏にあるふれあい農園でサツマイモを収穫！このあと、お菓子を作って老人ホームへ届けました

能登町立上町公民館

字上町 8-485 ☎ FAX 76-0249
■地区世帯数 446 ■人口 1,227



合鹿分館
字合鹿 28-65



斉和分館
字中斉7部 77



合鹿分館の4世代交流会の様子。行事のはじめに行われる恒例の「宝引き」では、当たりはすれの付いた紐を全員でひっぱります



着なくなった洋服などの布を再利用して素敵な小物入れを作る斉和分館での「エコ手芸教室」



上町公民館で「柳田キリコ太鼓」を体験中！

た「学校」という灯が消えてしまったこの地区にとつて、公民館はこれまで以上に重要な存在となります。地区の歴史やこれまでの活動を振り返りながら、子どもたちの声が響く世代間交流の場として、心豊かな暮らしへつなげる地域づくりをこれからも支えていきます。

言葉は世代間交流

ひとりで学習することも大切ですが、公民館に足を運び、仲間と一緒に何かを体験するというのも貴重な経験です。世代を越えた交流活動で地域に残る風習を学んだり、伝統的な技術を見て聞いて体験してみれば、きっと新しい発見に出会えるはずです。

館長の小谷内博之さんは「いつでも、誰でも使って気軽に世間話が楽しめる、そんな空間でありたい」とこれからの公民館像について話します。上町公民館から生まれた文化活動や仲間の輪が暮らしの中で活かされ、明るく楽しい日々へつながっていくといいですね。



柳田中学校 音楽祭
心に響いたハーモニー

柳田中学校伝統の音楽祭が7月13日に同校体育館で行われました。33回目を数える今年の音楽祭は「僕らが創る最高の瞬間」をテーマに、昨年までのコンクール形式を発表会形式に、小学校6年生の見学を5・6年生での合唱参加に変更し、初めて小中合同の音楽祭となりました。オープニングを飾ったブラスバンド部の演奏から、各学年の合唱、そして生徒全員による合唱まで、会場には素敵なハーモニーが響き渡りました。

生徒会を中心に自分たちの手で築きあげた今年の音楽祭は、柳田中学校の新しい伝統として受け継がれていきます。



生徒全員での大合唱となった「大地讃頌」

地域の大学と市町が連携し、地域再生を目指します
地域づくり連携協定 調印式



地域づくり連携協定 調印式
地域再生のきっかけとして

自然環境をテーマにしたブランド化やグリーンツーリズムを展開する次世代のリーダー「能登里山マイスター」を養成するため、金沢大学と奥能登4市町が7月13日に地域づくり連携協定を能登空港ターミナルビルで結びました。

調印式には、金沢大学の林勇二郎学長のほか、県立大学の丸山利輔学長、輪島市・珠洲市・穴水町・能登町の首長が出席しました。この連携協定においては、地域再生・地域教育・地域課題の3点において当面5年間の相互協力を行うことになりました。

五色ヶ浜海開き
夏本番、海水浴は五色ヶ浜へ!

海水浴シーズンを迎えた7月20日、五色ヶ浜海水浴場で海開きが行われました。あいにくの雨模様の中、松波神社の橘宮司による神事が行われ、地元新保地区のみなさんと関係者らが今シーズンの無事故を祈りました。

五色ヶ浜海水浴場は能登町唯一の公営海水浴場で、名前のとおり美しい砂浜と穏やかな波が人気です。昨年も4,000人以上が訪れ、連日家族連れやグループなどでにぎわっていました。

遊泳期間は8月20日までで、監視員2人が午前10時から午後4時30分まで海水浴客を見守ることにしています。



雨の中、安全を祈願して海を清める

真剣な表情で模様を描く児童
柳田小学校 縄文体験学習



柳田小学校 縄文体験学習
世界で一つだけの縄文土器

古代の人々が培った生きるための知恵を学ぼうと、柳田小学校の6年生が縄文学習に取り組んでいます。5月に縄文館の見学、6月に火起こし体験を行ってきた児童たちは、7月4日に真脇遺跡体験館を訪れ縄文土器作りを体験しました。

体験館職員の指導を受けながら自分の思い描く形を作り上げた児童たちは、細い縄で模様を付けたり、思い思いの飾り付けをして世界で一つだけの縄文土器を制作しました。

この日作られた土器は、約1カ月自然乾燥したあと野焼きされ、児童たちの手に届けられます。

北河内ダムコンクリート初打設式
ダム本体に初コンクリート



▲タワークレーンに吊られるバケットには、4.5㎡のコンクリート

スクールシアター (演劇鑑賞)
演劇で伝える命の大切さ

町内の小中学生を対象に毎年開催されているスクールシアター。今年は小学校4・5・6年生約500人を対象にした演劇鑑賞が、6月25日に能都体育館で行われました。

子どものころから本物の芸術に触れることは、子どもたちの心を豊かにしてくれます。今回披露された演劇は、静岡県を中心に60年以上公演を続けているという劇団たんぼの「100万回生きたねこ」というタイトルです。命の大切さや自分が一番大切なことは何かというメッセージが込められた演劇に、児童たちは夢中になって見入っていました。



迫真の演技を見せる劇団たんぼ

メッセージを読み上げる保護司の宮崎良子さん (小木)
社会を明るくする運動メッセージ伝達式



社会を明るくする運動メッセージ伝達式
犯罪のない、明るい社会を

毎年7月は、社会を明るくする運動の強調月間です。7月2日、珠洲・能登地区保護司会の保護司7人が能都庁舎を訪れ、持木町長に法務大臣からのメッセージを伝達しました。

保護司は、犯罪や非行を犯した人が社会復帰するために、指導や相談などの支援をしています。

メッセージを伝達した保護司のみなさんは、犯罪や非行の少ない明るい社会を築くために街頭キャンペーンに出発、町内の事業所などにチラシを配り、運動の理解と協力を呼びかけていました。